





# 西瓜考

前田霧人

## 第一節 緒言

夏を代表する果物である西瓜は体を冷やす作用や疲労回復の作用があり、暑く体力の落ちるこの季節には最適の食材である。中国語では西域から伝わったため「西瓜」(xigua)、水分が多く夏出回ることから「水瓜」、「夏瓜」とも呼ばれ、英語では watermelon である。

FAO(国連食料農業機関)の二〇〇五年度統計によれば、世界の西瓜生産量は中国が全体の70%で断トツの一位、次いでトルコの4%、以下イラン、アメリカ、ブラジル、エジプトと続き、日本は僅か0.5%、西瓜は世界の果物であることが分かる。中国・北京市民が一年間に食べる量は一人当たり五十キロ(西瓜十個分)で、日本人の五倍とも言われている。

リビングストンのアフリカ探検以来、アフリカ南部のカラハリ砂漠と周辺サバンナ地帯が原産地とされる西瓜が日本へ渡来した時期、来歴は諸説あり煩雑故省くが、「西瓜」あるいは「水瓜」が「四季之詞」などとして俳諧書・季寄・歳時記類に登場するのは十七世紀中頃、江戸幕府三代将軍徳川家光

が没する少し前あたりからである。

当時の西瓜は黒皮、無地皮で、緑の地に黒い縞模様が一般的な現在のものとは外観、品種、栽培法共に異なるが、近世後期以降現在までずっと「西瓜」は基本的に秋の季語とされている。

二十一世紀刊の『新版・俳句歳時記』(雄山閣)、『現代俳句歳時記』(学習研究社)、『ザ・俳句歳時記』(第三書館)など「西瓜」を夏とする歳時記も存在するが、少数派である。

また、「冷し西瓜」、「西瓜提灯」は明治・大正以降、「西瓜割り」は更に新しい季語であるが、その季節区分は歳時記により夏あるいは秋と異なり、「西瓜」は秋、「冷し西瓜」、「西瓜提灯」、「西瓜割り」は夏という矛盾を抱える歳時記が少なからずある。

西瓜を秋季と定めたのは、俳句のデリケートな季節感によるものであろう。冷たく冷やしたり、切って氷片とまぜてたべる「氷西瓜」は、炎暑のころの好果物である。

(平凡社版『俳句歳時記』「冷し西瓜」)

冷し西瓜は炎暑の果物として親しみ深い。(文藝春秋版『最新俳句歳時記』「西瓜」)

西瓜は普通秋の部に分類されるが、現実には夏のものである。(『カラー図説日本大歳時記』「西瓜」)

秋に多く出回ったが、今では夏のうちから出荷され、夏のものとの印象が強い。西瓜は秋の季語とされているが、冷し西瓜は夏に分類されている。この矛盾は気にか

かるところ。現代では西瓜は盛夏のイメージである。

〔角川俳句大歳時記〕「西瓜」、「冷し西瓜」

これらは「西瓜」を秋とする歳時記解説の抜粋である。「西瓜」の季に明らかな疑問を感じながら、何時までも過去の考証に寄り掛かることを伝統と称する一方で、無秩序に新しい季語を加えて行く。こうした現状は歳時記の大きな問題点の一つである。

しかし、ここまで述べて来たことは言わば通説に過ぎない。

「西瓜」の季には近世と近現代、それぞれの時代に数奇な変遷があった。

## 第二節 近世の西瓜

歳時記における「西瓜」の季について考察するには、現在と品種、栽培法共に異なるとされる近世（江戸時代）の西瓜がどの季節に収穫され食されたのかをまず知る必要がある。

本草とは漢方医学で広く薬用となる動植物をいうが、表1は西瓜の成熟・収穫時期について記載のある当時の代表的な農書・本草書の類を刊稿年代順に纏めたものである。それらの記載内容を列記すると次の通りである。

### ① 『本草綱目』

「西瓜」解説に「七八月に実が熟し」と記載がある。

### ② 『庖厨備用倭名本草』

「西瓜」解説に「実ハ七八月ニ熟ス」と記載があるが、

この前後を含め『本草綱目』をそのまま丸ごと引用したものである。

### ③ 『本朝食鑑』

「西瓜」解説に「すなわち西瓜のことである。七月に熟し」と記載がある。

### ④ 『農業全書』（九州・中国・畿内）

「甜瓜」（甘瓜）解説に「五月は早く瓜熟するものなり」、「西瓜」解説に「甘瓜の終りて後熟し、味よく暑気をさまし」と記載がある。両解説を合わせると、西瓜が熟すのは陰暦六月・七月となる。

### ⑤ 『耕稼春秋』（富山県）

「瓜種子品々有」解説に「菓子瓜（筆者注、まくわり）ハ六月土用の内を最中とす。」「西瓜」解説に、「六月土用に入初に花咲。其以後花ちり実成熟瓜すかる（筆者注、まくわりをとり終わって茎が枯れてしまう）時分西瓜熟す。」と記載がある。両解説を合わせると、西瓜が熟すのは陰暦七月となる。

### ⑥ 『大和本草』

「西瓜」解説に「甜瓜すでに終り、残暑未退時、此物盛出づ。世人食之消暑。」と記載がある。西瓜は「残暑未退時」即ち初秋・陰暦七月に出盛る。

### ⑦ 『和漢三才図会』

「西瓜」解説に「七、八月に実が熟する。」と記載があるが、『庖厨備用倭名本草』と同じく『本草綱目』をその

ま丸ごと引用したものである。

⑧『合志郡大津手永田畑諸作根付根浚取揚收納時候之考』(熊本県)

「西瓜」解説に「七月之節立秋比より一番成り二番三番と、八月之節白露比迄ニ採終り」と記載がある。初秋の陰暦七月が西瓜の収穫時期である。

⑨『耕作大要』(石川県)

「瓜・茄子・西瓜生り盛り」の記載が「麻刈ル」(「土用也。」と解説)、「田稗取ル」と一緒にある。「麻刈」、「田草取」は共に晩夏の季語であり、西瓜の「生り盛り」は晩夏・陰暦六月と考えて良い。

⑩『北越新発田領農業年中行事』(新潟県)

「西瓜」解説に「立秋七月節頃出来る。」と記載がある。初秋の七月が西瓜の熟す時期である。

⑪『本草図譜』

「西瓜」解説に「六七月に瓜熟す」と記載がある。

⑫『砂島菜伝記』(福岡県)

「西瓜」解説に「六月土用中などに取らんとおもハハ余程早めに蒔付すしてハ実いらす。」と記載がある。西瓜は早くすれば陰暦六月に収穫出来ることを示唆する。陰暦六月・七月が収穫の時期である。

⑬『耕耘録』(高知県)

「六月」解説に「○茄子食用初 ○西瓜同」と記載がある。陰暦六月・七月が西瓜を食する時期である。

右掲の中で『本草綱目』は明代の中国を代表する本草書で日本の本草学の基礎となったものであり、歳時記などにも良く引用されるが、勿論記載は日本の西瓜についてのものではない。また、『庖厨備用倭名本草』、『和漢三才図会』の記載は『本草綱目』をそのまま丸ごと引用したものである。

結局、参照するに足る他の十書を纏めれば、西瓜が熟し収穫され食される時期は初秋の陰暦七月説が五書、陰暦六・七月説が四書、晩夏の陰暦六月説が一書である。また、陰暦六・七月説の『農業全書』は上梓以来明治、大正以後まで二百年に亘って広く読まれた当時の代表的な農書である。それらを勘案総合すると、近世の西瓜が収穫され出回る時期は日本全体で見れば概ね陰暦六月・七月と考えて良いであろう。

一方、現在の西瓜は江戸時代に作られていた在来種と明治以降新たにアメリカなどから導入された品種との交配・育種により品種改良されたものである。また、栽培法も従来の露地栽培に代わりハウス、トンネル栽培が主流となっている。

現在、東京・大阪中央卸売市場のデータなどによれば、西瓜が出回るのは晩春・四月から初夏・五月が走りの時期、晩夏・七月をピークに六月から初秋・八月までが最盛期であり、また、見舞い、贈答など高級食材として一年中出回っている。

即ち、現在の西瓜は品種改良や栽培法の進化により早期あるいは周年の収穫が可能になったが、その最盛期はやはり盛夏から初秋であり、江戸時代とそんなに大きくは変わらないのである。

表1 江戸時代の農書・本草書

書名		分類	編著者	刊稿年	西暦年	地域	所収文献
本草綱目	本草書	李時珍	寛永一四※2	一六三七		*A	
庖厨備用倭名本草	本草書	向井元升	貞享元	一六八四		*B	
本朝食鑑	本草書	人見必大	元禄一〇	一六九七		*C	
農業全書	農書	宮崎安貞	元禄一〇	一六九七		※3 *D・*G	
耕稼春秋	農書	土屋又三郎	宝永四	一七〇七	富山県	*J	
大和本草	本草書	貝原益軒	宝永六	一七〇九		*F	
和漢三才図会	百科事典	寺島良安	正徳二	一七一二		*H	
合志郡大津手永田畑諸作時候之考※1	農書	馬場十助	安永七	一七七八	熊本県	*M	
耕作大要	農書	林六郎左衛門	天明元	一七八一	石川県	*N	
北越新発田領農業年中行事	農書	九之助・善之助・太郎蔵	文政一三	一八三〇	新潟県	*K	
本草図譜	本草書	岩崎灌園	天保元	一八三〇		*I	
砂島菜伝記	農書	(未詳)	天保二	一八三一	福岡県	*M	
耕耘録	農書	細木庵常・奥田之昭	天保五	一八三四	高知県	*L	

(※1は書名が長いので一部省略、正式書名は本文参照。※2は初和刻本の刊行年。※3は九州中心に中国・畿内まで。)

第三節 近世における「西瓜」の季

近世歳時記における「西瓜」の季を調査するに当たって図書館、書店等で入手出来た文献により参照した歳時記類の刊稿年代順一覧を文末の表3に示す。それらに「四季の詞」などとして掲出された「西瓜」あるいは「水瓜」の季、及び解説の抜粋を年代順に列記すると次の通りである。

翻刻がなく影印の読解によるものは初心者故、あるいは細部に誤りがあるかも知れないが、本筋は間違っていない筈である。また、必要に応じて句読点、振り仮名を付加し、漢文は訓み下し文とした。『俳諧歳時記』（改造社）の「古書校註」、『図説俳句大歳時記』（角川書店）の「考証」を一部参照した。

①『毛吹草』——正保二年（一六四五）・重頼編

「から瓜」の傍題「水瓜」として六月に所出。

② 『増山井』—寛文七年（一六六七）・季吟著

「瓜」の傍題「水瓜」として六月に所出。

③ 『詠諧番匠童』—元禄二年（一六八九）・和及著

「麻瓜」の傍題「西瓜」として六月に所出。

④ 『俳諧をだまき』—元禄四年（一六九一）・竹亭著

「瓜」の傍題「水瓜」として六月に所出。

⑤ 『俳諧大成新式』—元禄十一年（一六九八）・鷺水編

「瓜」の傍題「すいくわ」として六月に所出。

⑥ 『滑稽雑談』—正徳三年（一七一三）・其諺著

「西瓜」として六月に所出。「時珍本草曰、七八月実

熟、「此者甜瓜にをくれて熟し、秋に至るまで賞す、故

に夏に非ず秋也と云ふ、好む所に随ふ可し。」と解説。

⑦ 『通俗志』—享保二年（一七二七）・員九（胤及）著

「西瓜」として七月に所出。

⑧ 『俳諧古今抄』—享保十四年（一七二九）

「冬瓜」に「西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ、冬瓜ヲ冬ト定

ムベキナリ。」と解説。

⑨ 『其傘』—元文三年（一七三八）・貞山著

「西瓜」として七月に所出。

⑩ 『改式大成清鑑』—延享二年（一七四五）以前・不角

著

「西瓜」として六月に所出。「前旬夏にならば夏に用

と解説。

「西瓜」として七月に併出。「夏尤も賞翫スルものな

り。前旬夏にならば夏に用ゆべし。発句には秋」と解説。

⑪ 『俳諧手挑灯集』—延享二年（一七四五）・貞山著

「瓜」の傍題「水瓜」として六月に所出。

「西瓜」として七月に所出。

⑫ 『俳諧四季部類』—安永九年（一七八〇）・二柳著

「西瓜」として七月に所出。

⑬ 『華実年浪草』—天明三年（一七八三）・龜文著

「水瓜」として六月に所出。「本朝食鑑ニ曰、即ち西瓜

也、「増山井ニ夏ニ出ス。秋ト為可シ」と解説。

「西瓜」として七月に所出。「時珍カ曰、七八月ニ実熟

ス、「大和本草ニ曰、三月種ヲ下シ、蔓延シテ地ニ布キ、

四五月黄花ヲ開ク。甜瓜之花ノ如シ。其葉掌ノ如ク刻釵

指ノ如シ。六七月熟ス。甜瓜既ニ終リ残暑未タ退力ザル

時此物盛ンニ出、世人之ヲ食フテ暑ヲ消ス。」と解説。

しかし、『大和本草』に記載があるのは「甜瓜既ニ終リ

以下の部分のみで、他の部分は明らかな誤引用である。

⑭ 『俳諧小筌』—寛政六年（一七九四）・八悟著

「西瓜」として七月に所出。

⑮ 『俳諧歳時記』—享和元年（一八〇一）・曲亭馬琴編

「水瓜」として六月に所出。「是西瓜なり。増山井夏に

出ずは秋なるべし」と解説。

「西瓜」として七月に所出。

⑯ 『俳諧季寄大全』—享和二年（一八〇二）・不二庵（二

柳)序

合刻した二書の一、既出⑫『俳諧四季部類』に「西瓜」として七月に所出。

⑬『季引席用集』—文政元年(一八一八)・存義遺稿

「西瓜」として七月に所出。

⑭『増補改正俳諧歳時記菜草』—嘉永四年(一八五二)・

藍亭青藍編

「西瓜」として七月に所出。

即ち、初出と思われる一六四五年の『毛吹草』から一七一年の『滑稽雑談』まで七十年間に亘り、「水瓜」あるいは「西瓜」の季は現在の通説とは相違し、一貫して陰暦六月・晩夏であった。

それが夏、秋「好む所に随ふ可し」とした『滑稽雑談』を境に変化を見せ始め、まず『通俗志』で「西瓜」が陰暦七月・初秋に設定される。

そして、「水瓜」あるいは「西瓜」を六月、「西瓜」を七月に併出、従来の「水瓜」六月説を批難、「水瓜」を抹消という過程を経て「西瓜」の季が陰暦七月・初秋に一本化される。その間、一七一七年の『通俗志』から一八一八年の『季引席用集』まで、丁度百年の歳月が流れている。

しかし、こうした「西瓜」の季の変遷には「西瓜を秋季と定めたのは、俳句のデリケートな季節感によるものである。」(平凡社版『俳句歳時記』「冷し西瓜」解説)などという詩的、文学的な感覚とは凡そ掛け離れた次のような諸要素

が明白に介在する。

①同じ「西瓜」を「水瓜」あるいは「西瓜」として六月、七月に併出する御都合主義。

②「夏尤も賞翫スルものなり」としながら、「西瓜」を初秋に配する矛盾。

③「前句夏にならば夏に用ゆべし。発句には秋」という俳諧式目(規則・法式)の関与。

④確固たる根拠の掲出もなく『増山井』の所説を批難する流派間の勢力争い。

⑤中国の文献『本草綱目』を無批判に引用したり、誤引用を犯したりの安易なディレッタンテイズム(好事趣味)。

文献\*1によれば、季寄せの部に『増山井』の影響が顕著な「水瓜」あるいは「西瓜」を陰暦六月・晩夏とする『詠諧番匠童』、『俳諧をだまき』は異版、増補版が多く、『俳諧大成新式』は後刷本が多く、何れもかなり後まで行われた作法書である。

また、『増山井』は改版本、校訂本、注釈本が近世後期に及ぶまで作られ、遙か後まで標準的な季寄せとして尊重されていたことを窺わせる。最も後のものでは文化十三年(一八一六)序、内容にほとんど異同がない校訂本がある。

そして、何よりも『増山井』は俳句に係わる人の全てが尊敬する俳聖芭蕉の活躍した時代を代表する季寄せで、その師、北村季吟が編んだものであり、「増山井御用可然候。」と書かれた芭蕉の晩山宛偽簡(文献\*15)、即ち偽物の書簡が出現



する程のものである。

それなら何故「西瓜」は古来秋季という通説が現在までも続いているのか。それについて示唆を与えるものは近世から現代に至る季題数の変遷を示す表2である。

これは宇田久「季題の変遷」(『季の問題』)に掲出のものに所定の改変を加え作成したものであるが、『滑稽雑談』を境にした季題数の急激な増加と、先に述べた同書を境にした「西瓜」の季の変遷が見事に一致するのである。

発句には常に季題を必要とするに反し、付句には必ずしもそれを必要としない場合が多いのであるから、季題の変遷というものは、発句とこそその消長を共にすべきものであることは言うを俟たない。(略)

蕉門以降、季題が急増したという理由は、単に文化の変遷に伴って新しく取り入れられる季題が生ずるという一般的なる理由の外に、元禄時代を転期として、俳諧の主張と流行が、連句全盛時代から発句尊重時代へ転向して行った事に存すると、考えなければならなくなると思う。従って、俳人の要求する季寄類には、季題の豊富なものほど希望されるに至った。麦水も、初心者<sup>の</sup>の俳席に交わる時の心得として、『蕉門一夜口授』中の一節に、  
何にても見安き、多く季物の入りたる一書を懐にして、夫にて済すべし。

と記している。(宇田久「季題の変遷」『季の問題』)

宇田久が続いて指摘するように、「而して、この事は年を

逐うて梓行された多くの季寄・歳時記の類書に、最も顕著に現われている」ことは表2を参照すれば明らかである。

即ち、「西瓜」の季の変遷の根底にあるのは近世前期の主流をなした『増山井』系に代わり、『滑稽雑談』を境に「西瓜」を初めて陰暦七月・初秋に掲出した『通俗志』に始まる近世後期(一七一六年からの享保期以降、明治維新前年の慶応三年まで)の歳時記類に見られる別の大きな系統の起りである。そして、それは「発句の独立化や、俳諧の普及と大衆化の趨勢に伴うもの」(文献\*2)であった。

こうして、「西瓜」を夏とした『増山井』系ではなく、「西瓜」を秋季に配した「発句の独立化や、俳諧の普及と大衆化の趨勢」に即して季語数の格段に増加した新しい系統の季寄・歳時記類が大衆に支持され、主流となつて行った。そして、それに伴い「西瓜」の季は秋であるということもまた、通説となつて行ったのである。

ここまで考察して来ると、単に「西瓜」の季に止まらない非常に興味深い、かつ大きい命題が浮上して来る。即ち、芭蕉から見れば、『増山井』の三、四倍に季語数が増加した現在の歳時記によって詠まれる作品の多数は無季俳句であり、その作者である現代の俳人は全て一人の例外もなく無季俳人であるということである。

「発句も四季のみならず、恋・旅・名所・離別等、無季の句ありたきもの也。されど、如何なる故ありて四季のみとは定め置れけん。其事をしらざれば、暫く黙止侍る」とは『去

来抄』に見る無季の発句に対する芭蕉の思いである。

また、元禄十五年（一七〇二）刊の太田白雪編『俳諧三河小町』には「付肌はさるものにて 先おもしろき句は 前不聞とも句ひにをしはからるるや 翁の詞也」と付句に対する芭蕉の見解が述べられ、そうした良い付句を選んで前句無しに集となし一句立として鑑賞する試みが実践されている。そして、次はそのことに言及した頼原退蔵「季の問題」(『俳句周辺』)中の一節である。

成程発句は俳諧一卷中の最も主要な句であり、それ故にこそ発句だけが独立に創作されたのである。けれども又それ故に、他の三十五句が軽んぜられるという事は決してなかった。付句は名の如く付句であるから、勿論独立に創作される筈はない。けれどもその鑑賞が一句として独立になされる事は常であつた。(略)

彼は有季の発句に於て、俳諧が達し得る最高度の美を示すことが出来た。けれども芭蕉が俳諧にさびの美を發揮したのは、何も発句に限つたわけはなかつたのである。無季の付句にも俳諧としての最高の美を与えた。しかもこの無季の付句をもたない現代の俳諧は、『去来抄』に伝えられたあの芭蕉の言葉を味わおうともしないで、季感を伴う俳句のみに閉じ籠もろうとするのであろうか。しかし人は又言うかも知れない。それでは俳句は川柳と同じものになりはしないかと。(略)要するに川柳の本性はやはり俳諧である。それがさびの理念の支配から出てを

かしみもしくはうがちへ走つた結果、かの『柳多留』に収められた如き作品が生れたのである。だから川柳の笑が単なる笑でなく、作者の深い愛に包まれた場合、それはやはり俳諧にかえるであろう。或は俳句と同じものになると言つても宜い。或は又そこにも、俳句の領域が拡張されると言つても宜い。所詮俳句は本来花鳥諷詠に封じ込めらるべきものではないのである。

頼原退蔵の論を踏まえて先の命題を言い換えると、発句の独立に加え付句の独立をも俳句となし「俳句の領域を拡張すること、無季の発句や付句についての芭蕉の真摯な思いに直接向き合うことなく、大衆に取っ付き易く手取り早く実現させる方式が、掲載季語数を格段に増加した歳時記を登場させることであつた。

また、そうしたことが現在も頑に有季俳句を固守する俳人たちが生き延びて行くための正に巧妙な「からくり」と言つて悪ければ方策なのであり、現在も肥大を続ける歳時記の根底に潜む切実な事情に外ならない。

正岡子規の「俳句革新」以来、俳諧の発句が独立したものが俳句であるとされる。しかし、そのような俳句の定義は実は『俳諧大要』の何処にもない。

「俳句には多く四季の題目を詠ず。四季の題目無きものを雑ざと言ふ。雄壯高大なる者に至りては必ずしも四季の変化を待たず。」との言はむしろ、付句あるいは平句の独立をも含めた俳句を示唆するかのようである。

そして、そこには俳句における有季・無季の問題を曖昧に  
 したまま「連俳は文学に非ず」（「芭蕉雑談」）と言つてしま  
 った子規の若さと性急さ、あるいは、それを逆手に取つたか  
 のような「守旧派」虚子の強かな老獪ろうかいさが浮彫うきぼりになつて来る。

若き日の伊東静雄が「子規の俳論は俳句の本質に関する論  
 というよりも、むしろ俳壇革新という啓蒙的な、歴史的な意  
 義をより多く持つものである。否或はそれが全部とさえ言え  
 よう。」と卒論「子規の俳論」に書く所以である。

表2 近世から現代に至る季題数の変遷

書名	刊稿年	西暦年	春季題	夏季題	秋季題	冬季題	季題合計
誹諧初学抄	寛永一八年刊	一六四一	一五三	一八八	一四七	一一一	五九九
はなひ草	正保 四年刊※1	一六四七	一九六	一七七	一六〇	一一六	六四九
山之井	慶安 元年刊※2	一六四八	三〇九	一八五	三五〇	一八八	一〇三二
滑稽雑談	正徳 三年稿	一七一三	六三〇	五五四	四〇九	二四六	一八三九
華実年浪草	天明 三年刊	一七八三	八〇六	六五九	八二八	四七五	二七六八
俳諧歳時記	享和 三年刊※3	一八〇三	七二〇	六七四	七六七	四四〇	二六〇一
増補改正俳諧歳時記葉草	嘉永 四年刊	一八五一	九七八	八三二	一〇三四	五八三	三四二七※4
俳諧歳時記(改造社)	昭和 八年刊	一九三三	一六九一	一三八七	九六三	七八九	四八三〇
角川俳句大歳時記	平成一八年刊	二〇〇六	一六二九	一五九二	一一三六	九一二	五二六九

（本表は宇田久「季題の変遷」『季の問題』掲出の表に表題と西暦年を付加し、書名を後出の表3に合致させ、※4の合計  
 計算を訂正し、文献※24による改造社版『俳諧歳時記』と、筆者による『角川俳句大歳時記』見出し季語数のデータを加え  
 たものである。その際、新年季題は近世歳時記に合わせる形で春季題に合算した。また、後出の表3と異なる刊稿年は※1、  
 ※2が後刷本、※3は刊行年で、何れも文献※17所収の宇田久「歳時記解説」に記載がある。）

#### 第四節 近現代における「西瓜」の季

『俳諧大要』が刊行された明治三十二年（一八九九）から

現在までに発行された歳時記の内、筆者の書棚にあるもの及  
 び必要に応じて図書館等で閲覧したものを初版年代順に並べ  
 た一覧を文末の表4に示す。それらを元に、近現代における

「西瓜」の季の変遷について考察する。

四・一 明治・大正から昭和八年までの歳時記

次は子規の俳句革新後、改造社版『俳諧歳時記』が上梓される昭和八年（一九三三）までに刊行された歳時記を「西瓜」の季によって分類したものである。なお、昭和七年（一九三二）刊の水原秋桜子編『現代俳句季語解』については別項で考察するので、ここでは除外する。

① 「西瓜」を夏とするもの

『新歳事記』—明治三十六年・大江瀧畝編

『俳句新歳事記』—明治三十七年・寒川鼠骨著

『歳事記例句選』—明治四十年・寒川鼠骨編

『懸葵季寄せ』—大正十二年・沼法量編

『詳解例句纂修歳事記』—大正十五年・今井柏浦編

『昭和新修大成歳時記』—昭和二年・宮田戊子著

『昭和大成新修歳時記』—昭和八年（右掲の改訂版）

② 「西瓜」を秋とするもの

『俳諧例句新撰歳事記』—明治四十一年・今井玉三郎編

『新修歳時記』—明治四十二年・中谷無涯編

『俳句資料新撰歳時記』—明治四十五年・田山白人著

『新校俳諧歳事記』—大正十四年・今井柏浦編

『最新俳句歳事記』昭和五年・小泉迂外著

『俳文学大辞典』などを参照すると、「西瓜」を夏とする歳時記の編著者は不詳の大江瀧畝以外全て、子規が新聞「日本」の俳句欄を中心に展開した明治新派俳句の一流派「日本

派」と係わりが深い。

まず、寒川鼠骨は河東碧梧桐の影響で句作を始め、子規を知り、新聞「日本」記者になり、後には『子規全集』など子規の遺業編纂に従事し、子規庵の保存にも尽力した。

沼法量（俳号・夜瀧）は碧梧桐、終生子規と新派俳句の賛仰者であった大谷句仏に俳句を学び、句仏主宰「懸葵」の編集に当たると共に選者の一人となった。

また、今井柏浦（玉三郎）は子規門下の俳人として『明治一万句』を始め日本派の句集を数多く編纂した。柏浦編『詳解例句纂修歳事記』は青木月斗、室積徂春らの所説を参酌して「西瓜」の季を秋から夏に改訂しているが、彼らもまた子規や碧梧桐と係わりの深い人たちであった。

そして、『昭和新修大成歳時記』に「序」を寄せた石井露月は新聞「日本」記者となり、子規に俳句を学び、子規命名による「俳星」を創刊し、日本派の重鎮として東北地方は元より中央俳壇に重きをなした。

実は、子規自身既に『俳諧大要』で「四季の題目にて花木、花草、木実、草実等はその花実の最多き時を以て季と為すべし。梨、西瓜等亦必ずしも秋季に属せずして可なり。」と記していた。

近世連歌・俳諧の発句・其他を収集分類した子規自筆稿本を纏めて昭和三年（一九二八）から昭和四年にかけて刊行された『分類俳句全集』（アルス）では、「西瓜」は前節に述べた経緯を踏襲する形で秋季に配されている。

しかし、近代俳句の出発点において、その主導的役割を担った子規一派は自らの編んだ歳時記に「西瓜」は夏季のものであることを明記したのである。

そして、この時期全体で見た歳時記の数においても「西瓜」を夏とするものは、秋とするものに比べて遜色はない。

また、『昭和重修大成歳時記』の「跋」で、宮田戊子は既刊の歳時記が「售らん哉主義に基いた商略から古句に名吟があるのに今人の句ばかり例句に挙げていること」に苦言を呈している。出版界の事情というものは昔も今も変わらないものようである。

一方、「西瓜」を秋とする歳時記の内、『最新俳句歳事記』の著者、小泉迂外は日本派の對抗勢力として知られる「秋声会」で作句した人。この後「西瓜」の季の変遷に様々の形で係わる虚子が「序」を寄せているのも非常に興味深い。

また、「凡例」には「従来この種の例句は編者が党派の観念に偏執して、専ら自己に都合のいい作家のみを網羅したので、初学者をあやまるが多かった。本書は、こういった党派の観念を打破し、昭和三年春から昭和五年四月まで約一ヶ年半の間の『ホトトギス』『俳諧雑誌』『曲水』（略）等をはじめ二十余の俳句雑誌及び各新聞に渉り、新進作家の作品のみを特に厳選して採用した。」とあり、先の『昭和重修大成歳時記』と全く反対の方針を打ち出しているのも面白い。

「新進作家」が僅か一年半の間に果たしてどれだけの名吟を残せるか素人考えにも甚だ疑問であり、著者の言うような

「党派の観念を打破」するものであるのか、先の宮田戊子が言う「售らん哉主義に基いた商略」であるのか、あるいはその両方であるのか、議論の分かれる所である。

#### 四・二 改造社版『俳諧歳時記』

昭和八年（一九三三）に刊行された改造社版『俳諧歳時記』は「歳時記史上画期的な、ほとんど歳時記の完成した姿を見せてくれる」（筑紫磐井「歳時記と季語の歴史」『角川俳句大歳時記・新年』）とも言われる程のものである。

一方で「この総花的方式の歳時記、百科事典的俳句歳時記のありかたは、果たして正しかったのか」（橋本直「豊かな時代」の網羅主義）「週刊俳句第四号」二〇〇七年五月二十日発行）との視点を異にした辛口の評価があり、時を経た現在も話題に事欠かない意味においても「歳時記史上画期的な」存在である。

この歳時記は高浜虚子（「ホトトギス」）、青木月斗（「同人」）、松瀬青々（「倦鳥」）、大谷句仏（「懸葵」）ら当時の代表的な結社主宰が各巻を担当し、藤井乙男、牧野富太郎始め当代切つての著名な国文学者、科学者が古書校註・参考を執筆する。

また、虚子が担当し富安風生、山口青郎が補助した「春之部」、「冬の部」で言えば鈴鹿野風呂、川端茅舎、日野草城、山口誓子、松本たかし、中村草田男、杉田久女、星野立子などと、各巻とも豪華執筆陣が季題解説を担当している。

勿論、昭和六年十月に例の『自然の真』と『文芸上の

真』を「馬酔木」誌上に発表して「ホトトギス」を離脱し虚子と袂を別った水原秋桜子の名はそこない。

しかし、この後、秋桜子と虚子は「西瓜」の季を異にした歳時記を巡って再び相まみえることになるのだから、因縁とこの歳時記において「西瓜」は青木月斗編「夏之部」と松瀬青々編「秋之部」に併記される形で掲載されている。これは先に述べた子規一派の各歳時記と子規編『分類俳句全集』における「西瓜」の季に準拠したものである。そして、各々

「西瓜」の「実作注意」欄には次のように述べられている。西瓜は昔は秋の季節なりしを、近時は夏日市場に現るを以て、夏の季節として採録するを普通とす。但し、古歳時記の説明は秋なるべし。(「夏之部」)

古歳時記及季寄せの類に、西瓜の季を定めて初秋の部に入れたり。よって古人の句は皆その意を以てせるものなり。然るに現今の実際は晩夏盛んに市に出でて人はを賞美し、秋に至って其味の劣るは、世人の要求に応ずる栽培の方法変化せるに基づくものにして、今、実際に即すれば西瓜は夏季に移すも宜しからんも、今遽に秋季よりこれを除けば、或は古人の句意の汲み難きものあるやもしれずと思ひ、急に削除するに忍びず、本歳時記に暫らく慣例に従いて秋季に存置することとしたり。但し西瓜の季は晩夏、初秋に互る季物とするが穏当ならん。

(「秋之部」)

また、これに対応して「夏之部」には子規、月斗らの作品九句、「秋之部」には鬼貫、其角ら古人を中心に子規、別天楼に至る作品二十句がそれぞれ例句として挙げられている。

これらを見ると、我々の大先輩に当たる月斗、青々らが如何に真面目で柔軟で、高い見識と決断力を持った素晴らしい俳人たちであるかが本当に良く分かる。

「但し西瓜の季は晩夏、初秋に互る季物とするが穏当ならん。」という青々らの真摯な思いを七十五年経った今も満足に歳時記に反映出来ていない不勉強と優柔不断を、現代の俳人たちは大いに恥じなくてはならないのである。

しかし、この『俳諧歳時記』において「西瓜」の季に係わりのある「夏之部」、「秋之部」の編集が何れも虚子の担当外であったことは、偶然とはいえ不思議な巡り合わせである。

#### 四・三 虚子編『新歳時記』(三省堂)

「西瓜」の季に対する月斗、青々らの真摯な態度を僅か一年の後に反古にしたのが昭和九年(一九三四)に三省堂より刊行された虚子編『新歳時記』である。

虚子は既に『俳諧歳時記』「序」で「初め改造社から相談を受けた時分に、私は多忙でもあるし其任に非ざと云って辞退した。けれどもたつてとの事であったので、遂に承諾することになった。」と書いている。彼が『新歳時記』を発刊した背景には、改造社版『俳諧歳時記』の編集スタッフと編集方針と、その両面における大いなる不満があった。

まず編集スタッフについて『俳文学大辞典』などを参照す

ると、青木月斗は「ホトトギス」課題選者となり「虚子と歩みをともした。」(文獻\*25)とは言え、妹の茂枝は虚子の宿敵碧梧桐の妻、実子の御矢子はその養女である。また、大谷句仏は新傾向俳句の影響を受け、碧梧桐の全国行脚に物心両面の援助をした人。松瀬青々は「生」の問題を掲げた哀調より起こる大自然憧憬こそ真に味ふべき深いものである。」という人生の至境を求める俳境で、季節趣味的な「花鳥諷詠」を唱導する虚子とは一線を画した俳人(文獻\*26)である。

「古書校註」を担当した国文学者では、志田義秀(ぎしゅう)は子規系の俳人でもあり、中塚一碧楼に接近したり、大須賀乙字に共鳴したり、大谷句仏主宰「懸葵」の選者をしたこともある。

また、頼原退蔵は前節に紹介した革新的な俳論を数多く遺した人である。そして、その彼が薰陶を受けた透徹した論理と鋭敏な感性の持主と評価の高い藤井乙男(しげお)もまた革新的な頭脳を持った学者であったと推察される。

これらの陣容が「守旧派」を自認する虚子に到底満足行くものでないことは想像するに難くない。そして、何よりも『新歳時記』発刊に先立つこと八カ月、同年三月に改造社より創刊された総合誌「俳句研究」において「創刊号執筆者の顔ぶれは、高浜虚子を除く俳壇のほとんどを網羅」(『俳文学大辞典』「俳句研究」)するという事実が全てを物語る。

次に、『俳諧歳時記』の編集方針に対する虚子の不満であるが、当然のことながら、それは彼の『新歳時記』「序」に如実に表れている。主な箇所を列記すると次の通りである。

一言にしていえば文学的な作句本位の歳時記を作るのが目的であった(略)。

春の風・春の水・春暁・春昼等があるから対蹠的に夏の風・夏の水・秋の朝・秋の昼等もなければならぬとして其等の題を設けたり、二十四気や七十二候も気候であるからとして之を入れたり、外国の記念日やあらゆる神社の祭礼等を選択なく取入れたり、季節だけで十三四字甚しいのは十七字を超過するものがあつたり、これ等は季はあるには相違ないが俳句の季節としては不適当なものである。本書は季節の取捨に最も重きを置いた(略)。

簡単にして要を得るといふ信条の下に博物学的な叙述を避け事実在即し句作上必要なことに止めた。

勿論、これら虚子の言は一応の正論であるが、それが全て改造社版『俳諧歳時記』の編集内容を批判したものとなっている所が味噌である。彼の不満は相当なものであつた。

そして、肝心の『新歳時記』における「西瓜」の季であるが、「西瓜・蜻蛉(とんぼ)等も寧ろ夏が多いのに秋とし」たのは「其季節に対する感じが重きを為したものである。」と虚子が「序」に明記するように、「西瓜」は当然の如く陽曆八月・初秋の季語となっている。

西瓜は昔から秋季としたものであるが、近來栽培法が発達し、外来種なども多くなり早生種が多く市場に現れるようになった。七夕によく之を供える。

これが虚子の「西瓜」解説であり、後の稲畑汀子編『ホト

トギス新歳時記』も同文を踏まえて次のような解説である。

明治以後いろいろと改良され優良なものを産するようになった。夏から出回るが、昔から七夕などに供えられ、

俳句では初秋としてあつかっている。

しかし、第一節で述べたように、現代の俳人大多数の感覚では「西瓜は盛夏のイメージ」（『角川俳句大歳時記』「冷し西瓜」解説）である。また、確かに西瓜は七夕にも供えられるが、西瓜から直ちに七夕をイメージする人は多くないであろう。虚子らの「西瓜」という「季節に対する感じ」は明らかに一般と乖離ひらしているのである。

うり西瓜うなづきあひて冷えにけり 虚子

そして、彼らの矛盾を象徴するのが『新歳時記』、『ホトトギス新歳時記』双方に「西瓜」例句として掲げられたこの句である。両歳時記共に、「瓜」、「冷し瓜」は夏の季語である。夏季の「瓜」と秋季の「西瓜」がどうやって領き合うのか。

秋の西瓜を冷やせば、夏にタイムスリップするとしても言うのか。そうなれば、タイムスリップ出来ないまま秋の季節に残された我々には西瓜が永遠に食べられないという、何とも悲惨な話になってしまうのである。

四・四 秋桜子編『新編歳時記』（大泉書店）

秋桜子が「ホトトギス」を離脱した昭和六年十月から昭和二十年代の終わりまでの間に秋桜子と虚子の刊行した歳時記を列記すると次の通りである。

○昭和七年十二月―秋桜子編『現代俳句季語解』（交蘭社）

○昭和九年十一月―虚子編『新歳時記』（三省堂）

○昭和十三年五月―秋桜子編『新選俳句季語解』（交蘭社）

○昭和十五年四月―虚子編『新歳時記』改訂版

○昭和二十六年三月―秋桜子編『新編歳時記』（大泉書店）

○昭和二十六年十月―虚子編『新歳時記』増訂版

虚子は昭和三十四年四月に八十五歳で没しているが、偶然と言うには余りに年月の符合した秋桜子と虚子の歳時記刊行と、その改訂振りである。

秋桜子編『新編歳時記』は昭和二十六年（一九五二）に刊行されて以来、幾度かの改訂、改題を経て平成七年（一九九五）に『俳句歳時記』として講談社文庫に収められるまで、五十回の版を重ねるロングセラーとなる。

そして、この『新編歳時記』を含めた全ての秋桜子編歳時記において「西瓜」の季は一貫して夏（晩夏）である。また、そのことが自明であるかの如く、解説中に「西瓜」の季についての議論を一切述べず、随想に徹しているのが特徴である。

秋桜子は昭和三十四年（一九五九）刊の平凡社版『俳句歳時記』（富安風生編集代表）で「秋の部」を担当し、「西瓜」解説を執筆したことがある。その時も、彼は「西瓜」の季については一切触れず、ただ淡々と筆を進めるのみであった。

西瓜は細かく切つて匙さしを添えて出すよりも、大きな儘ままかぶりつくところに味がある。ざつくばらんの感じで、家内のものが車座になり、一つの西瓜を争いあつて手を出すのは、いかにも距ひたてなく好もしい情景である。然し



女などになるとそうは行かず、もじもじして手を出せない。久保田万太郎の戯曲に、若い女が簪かんざしの足で種をほらいながら食べる描写があるが、いかにも下町の感じを出していると思う。

これは『新編歳時記』初版で夏の部を担当した能村登四郎の「西瓜」解説である。登四郎は当時四十歳、この年に第一回新樹賞を受賞する「馬酔木」新進の時代である。「もじもじして手を出せない」女性が昨今いるかどうかは別にしても、西瓜は夏だ秋だという講釈などなしに、こんな情緒溢れる解説に終始出来る歳時記の時代が待たれるのである。

## 第五節 結語

「西瓜」の季は古来「秋」であるという「通説」が「真説」と如何に掛け離れたものであるか、ここまで述べた通りである。その後、昭和三十年代以降、各社から幾多の歳時記が刊行されて来たが、第一節に述べたように「西瓜」の季に対する扱いは相変わらずのものが大勢を占める。

これが現代の俳人や編集者の不勉強によるものか、虚子あるいは「ホトトギス」の勢力が今もなお俳句界、出版界に厳然たる支配を及ぼしていることによるものかは知らない。

しかし、これまで述べたことを事実として踏まえるなら、もう何時までもそのような形骸化した非文学的な世界に胡坐あぐらをかいていくべきではないのである。

また一方で、「西瓜」を夏とするか、秋とするかは言わば歳時記の運用上の問題に過ぎず、その根底には現行の歳時記が抱えるもつと本質的な構造上の問題が存在することは「新歳時記通信」創刊号の「新歳時記考序説」に述べた通りである。そのことを「西瓜」について再度適用すると、現在の西瓜は第二節に述べたように晩春・四月から初秋・八月まで広く出回り、見舞い・贈答用には周年入手することが出来る。

「西瓜」は秋の季語といっても厳密には初秋・八月で、特に現実と遊離している訳ではないし、仮に夏の季語となつた所で「西瓜」の季が限定されてしまうことに変わりはない。

また、歳時記で植物の部に配される「西瓜」は食材としては「冷し西瓜」、「西瓜提灯」、「西瓜割り」などと同じ生活の部が相当であり、同じく栽培の一過程に係わる「西瓜蒔く」、「西瓜の花」が生活の部と植物の部に区分けされるのも何か釈然としない。

高温と強い光を好む西瓜は四月・五月の全国市場をほぼ独占する熊本県産から千葉県、山形県と、三大産地を中心に日本列島を南から北へとリレーして行く。因みに今年の我が家の初西瓜は四月下旬で、やはり熊本産であった。

初物の西瓜、盛夏の西瓜、残暑の西瓜、贈答や見舞いに戴く西瓜、場合によっては季節節を選ばない末期まごの西瓜ということもあるであろう。

そのような、それぞれに味覚があり心情がある「西瓜」の諸相をいたずらに分断することなく、全体的・総合的に把握

し提示するのが歳時記本来のあるべき姿である。

また、第三節の後半に述べたように、歳時記における「西瓜」の季について考察する中で思い掛けず、単に「西瓜」の季に止まらない非常に興味深い大きい命題が浮彫になって来た。これについては、続く各論で更なる考察を加えて行くことになるが、現段階で次のことは言えるのではないか。

即ち、季語と無季語、あるいは有季俳句と無季俳句の境界は歳時記のあり方を媒介とした相対的なものに過ぎず、決して

て絶対的な差異を以て両者を分かつものではない。換言すれば「季節感」の軸は人為的に動く多分に相対的なものであり、「物象感」の軸ほどに確固たる存在ではない。

その意味で、「新歳時記通信」「発刊の辞」に述べた「無季有季俳句融合の理想境」実現への道はもうはつきりと見えているのであり、「新歳時記考序説」に提示した「物象感の軸を第一義とする新しい俳句歳時記の形」がそんなに的を外れたものではないことを示唆しているとも言えるのである。

表3 近世歳時記一覧

書名	分類	編著者等	刊稿年	西暦年	翻刻文献	影印文献	原本
連歌至宝抄	連歌論書	紹巴著	天正一四成	一五八六	*3	*1	
匠材集	連歌辞書	紹巴跋	慶長二跋	一五九七	*4		
無言抄	連歌式目書	応其著	慶長八頃刊	一六〇三	*4	*1	
はなひ草	俳諧作法書	立圃編	寛永一三自奥	一六三六	*5	*1	
俳諧初学抄	俳論書	徳元著	寛永一八自跋	一六四一	*5	*1	
毛吹草	俳諧撰集・辞書	重頼編	正保二刊	一六四五	*6	*1	
山之井	季寄	季吟著	正保四成	一六四七	*7	*1	
俳諧御傘	俳諧式目書	貞徳著	慶安四刊	一六五一	*8・*1		
増山井	季寄	季吟著	寛文七刊	一六六七	*5	*1	
俳諧無言抄	俳諧作法書	梅翁著	延宝二刊	一六七四	*1抄出		
増補はなひ草	俳諧作法書	不詳	延宝六刊	一六七八	*8		
日本歳時記	歳時記	貝原益軒刪補	貞享五刊	一六八八	*E・*9		

誂諧番匠童 <small>はなみいばんじゆうわらわ</small>	俳諧作法書・季寄	和及著 <small>わきゅう</small>	元禄二刊	一六八九				
俳諧をだまき	俳諧作法書	竹亭著 <small>たけどう</small>	元禄四刊	一六九一			*	
俳諧大成新式	俳諧作法書	鷺水編 <small>さずみ</small>	元禄一刊	一六九八			*	
滑稽雑談 <small>こっけいざわだん</small>	季寄	其諺著 <small>いんげん</small>	正徳三序	一七一三			*10	
通俗志	俳諧作法書	員九(胤及)著 <small>いんく</small>	享保二序	一七一七				
俳諧古今抄 <small>ここん</small>	俳諧作法書	志考編著	享保一四自序	一七二九			*11	
其傘 <small>そのからかさ</small>	俳諧作法書	貞山著	元文三自序	一七三八			*12	
改式大成清匏 <small>きよかん</small>	俳諧辞書	不角著	延享二以前刊	一七四五				
俳諧手挑灯集 <small>てんてい</small>	俳諧作法書・句集	貞山著	延享二跋	一七四五				
篋纏輪 <small>わくがせわ</small>	俳諧作法書	千梅著	宝曆三自奥	一七五三				
俳諧糸切齒	俳論書	石橋著 <small>いしばし</small>	宝曆一二自跋	一七六二				
俳諧四季部類	季寄	二柳著 <small>にりゅう</small>	安永九刊	一七八〇				
俳諧名知折 <small>ななしおり</small>	季寄	素外編	安永九刊	一七八〇				
俳諧齒がため	俳論書	素外著	天明三自序	一七八三				
華美年浪草 <small>けいねん</small>	季寄	龜文著	天明三刊	一七八三				
俳諧小笠 <small>しょうせん</small>	季寄	八悟著	寛政六刊	一七九四				
俳諧歳時記	歳時記	曲亭馬琴編	享和元序	一八〇一				
俳諧新季寄	季寄	奇淵著	享和二序	一八〇二				
俳諧季寄大全	季寄	不二庵(二柳)序	享和二序	一八〇二				
季引席用集 <small>きびき</small>	俳諧辞書	存義遺稿	文政元序	一八一八				
季寄新題集	季寄	千艸園著 <small>ちそうえん</small>	嘉永元刊	一八四八				
増補改正俳諧歳時記葉草	歳時記	藍亭青藍編	嘉永四刊	一八五一			*13	

(書名始めデータ全般は文献\*14、『増補はなひ草』は\*18による。※は二書を合刻した『俳諧季寄大全』として所蔵。)

表4 近現代歳時記一覧

書名	発行	初版	西暦年	備考
新歳事記	寶文館	明治三六	一九〇三	大江瀧敏編。
俳句新歳事記	大学館	明治三七	一九〇四	寒川鼠骨著。
歳事記例句選	内外出版協会	明治四〇	一九〇七	寒川鼠骨編。例句に重点を置いた歳時記。
俳諧例句新撰歳事記	博文館	明治四一	一九〇八	今井玉三郎(柏浦)編。
新修歳時記	俳書堂	明治四二※	一九〇九	中谷無涯編。
俳句資料新撰歳時記	国文館書店	明治四五	一九一二	田山白人著。
懸葵季寄せ	懸葵発行所	大正一二	一九二二	沼法量編。
新校俳諧歳事記	修省堂	大正一四	一九二五	今井柏浦編。
詳解例句纂修歳事記	修省堂	大正一五	一九二六	今井柏浦編。『俳諧例句新撰歳事記』の改訂版。
昭和新修大成歳時記	星文閣	昭和二	一九二七	宮田戊子著。
最新俳句歳事記	平凡社	昭和五	一九三〇	小泉迂外著。
現代俳句季語解	交蘭社	昭和七	一九三二	水原秋桜子編。
昭和大成新修歳時記	大文館	昭和八	一九三三	宮田戊子著。『昭和新修大成歳時記』の改訂版。
俳諧歳時記	改造社	昭和八	一九三三	高浜虚子・青木月斗・松瀬青々・大谷句仏編。
新歳時記	三省堂	昭和九	一九三四	高浜虚子編。昭和一五年・改訂版、昭和二六年・増訂版。
新修俳諧歳時記	前田書店	昭和九	一九三四	小島伊豆海著。
新選俳句季語解	交蘭社	昭和一三	一九三八	水原秋桜子編。『現代俳句季語解』の改訂版。
新編歳時記	大泉書店	昭和二六	一九五一	水原秋桜子編。昭和三二年・改訂版。
季語集	大泉書店	昭和三〇	一九五五	水原秋桜子編。
俳句歳時記	角川文庫	昭和三〇	一九五五	角川書店編。平成一九年・第四版。

俳句歳時記	平凡社	昭和三四	一九五九	富安風生編集代表。水原秋桜子が「秋の部」季題解説。
図説俳句大歳時記	角川書店	昭和三九※	一九六四	角川書店編。
最新俳句歳時記	文藝春秋	昭和四六※	一九七一	山本健吉編。
季寄せ	文藝春秋	昭和四八	一九七三	山本健吉編。
合本俳句歳時記新版	角川書店	昭和四九	一九七四	角川書店編。平成二十年・第四版。
最新俳句歳時記	文春文庫	昭和五二	一九七七	山本健吉編。
現代俳句歳時記	大泉書店	昭和五三	一九七八	水原秋桜子編。『新編歳時記』の改訂版。
カラー図説日本大歳時記	講談社	昭和五六※	一九八一	水原秋桜子・加藤楸邨・山本健吉監修。
基本季語五〇〇選	講談社	昭和六一	一九八六	山本健吉著。平成元年・講談社学術文庫。
ホトトギス新歳時記	三省堂	昭和六一	一九八六	稲畑汀子編。
俳句小歳時記	大泉書店	昭和六二	一九八七	水原秋桜子編。秋桜子没後の刊。
現代俳句歳時記	千曲秀版社	平成元	一九八九	金子兜太編。平成八年・改訂版。
ふるさと大歳時記	角川書店	平成三※	一九九一	山本健吉監修。全七冊+別巻『世界大歳時記』。
俳句歳時記	講談社文庫	平成七	一九九五	水原秋桜子編。『現代俳句歳時記』の文庫化。
現代歳時記	成星出版	平成九	一九九七	金子兜太・黒田杏子・夏石番矢編。
合本現代俳句歳時記	角川春樹事務所	平成一〇	一九九八	角川春樹編。
カラー版新日本大歳時記	講談社	平成一一※	一九九九	飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修。
現代俳句歳時記	現代俳句協会	平成一一	一九九九	現代俳句歳時記編纂委員会編。
新版・俳句歳時記	雄山閣	平成一三	二〇〇一	桂信子・金子兜太・草間時彦・廣瀬直人・古沢太穂編。
現代俳句歳時記	学習研究社	平成一六	二〇〇四	現代俳句協会編。
ザ・俳句歳時記	第三書館	平成一八	二〇〇六	有馬朗人・金子兜太・廣瀬直人監修。
角川俳句大歳時記	角川学芸出版	平成一八	二〇〇六	角川学芸出版編。

(※は刊行開始年。)

参考文献（農書・本草書関連）

- \* A 『頭註国訳本草綱目9』李時珍著、鈴木眞海訳、昭和八年（一九三三）、春陽堂
  - \* B 『食物本草本大成7』吉井始子編、昭和五十五年（一九八〇）、臨川書店
  - \* C 『本朝食鑑2』人見必大著、島田勇雄訳注、昭和五十二年（一九七七）、平凡社東洋文庫
  - \* D 『農業全書』宮崎安貞編録、土屋喬雄校訂、昭和十一年（一九三六）、岩波文庫
  - \* E 『益軒全集1』貝原益軒著、益軒会編、昭和四十八年（一九七三）、国書刊行会
  - \* F 『益軒全集6』貝原益軒著、益軒会編、昭和四十八年（一九七三）、国書刊行会
  - \* G 『益軒全集8』貝原益軒著、益軒会編、昭和四十八年（一九七三）、国書刊行会
  - \* H 『和漢三才図会16』寺島良安著、島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注、平成二年（一九九〇）、平凡社東洋文庫
  - \* I 『本草図譜総合解説3』北村四郎・塚本洋太郎・木島政夫著、平成二年（一九九〇）、同朋舎出版
  - \* J 『日本農書全集4』山田龍雄・飯沼二郎・岡光夫編、昭和五十五年（一九八〇）、農山漁村文化協会
  - \* K 『日本農書全集25』山田龍雄・飯沼二郎・岡光夫編、昭和五十五年（一九八〇）、農山漁村文化協会
  - \* L 『日本農書全集30』山田龍雄・飯沼二郎・岡光夫編、昭和五十七年（一九八二）、農山漁村文化協会
  - \* M 『日本農書全集33』山田龍雄・飯沼二郎・岡光夫編、昭和五十七年（一九八二）、農山漁村文化協会
  - \* N 『日本農書全集39』佐藤常雄・徳永光俊・江藤彰彦編、平成九年（一九九七）、農山漁村文化協会
  - \* O 『第2次増訂改訂版農学大事典』野口弥吉・川田信一郎監修、昭和六十二年（一九八七）、養賢堂
  - \* P 『スイカ・カボチャ』農文協編、野菜園芸大百科5（第二版）、平成十六年（二〇〇四）、農山漁村文化協会
- 参考文献（歳時記関連）
- \* 1 『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』尾形侑・小林祥次郎共編、昭和五十六年（一九八一）、勉誠社
  - \* 2 『近世後期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』尾形侑・小林祥次郎共編、昭和五十九年（一九八四）、勉誠社
  - \* 3 『連歌論集・下』伊地知鉄男編、昭和三十一年（一九五六）、岩波文庫

- \* 4 『無言抄・匠材集』正宗敦夫編纂校訂、日本古典全集、昭和十一年（一九三六）、日本古典全集刊行会
- \* 5 『貞門俳諧集二』小高敏郎・森川昭・乾裕幸校注、古典俳文学大系2、昭和四十六年（一九七二）、集英社
- \* 6 『毛吹草』新村出校閲・竹内若校訂、昭和十八年（一九四三）、岩波文庫
- \* 7 『貞門俳諧集・下巻』勝峯晋風編著、普及版俳書大系14、昭和四年（一九二九）、春秋社
- \* 8 『蕉門俳諧続集・下巻』勝峯晋風編著、普及版俳書大系8、昭和三年（一九二八）、春秋社
- \* 9 『日本歳時記』貝原益軒刪補・貝原好古編録、生活の古典双書1、昭和四十七年（一九七二）、八坂書房
- \* 10 『滑稽雑談』四時堂其諺著、昭和五十三年（一九七八）、ゆまに書房
- \* 11 『俳諧註釈集・下巻』佐々醒雪・巖谷小波校訂、俳諧叢書2、大正二年（一九一三）、博文館
- \* 12 『享保俳諧集』鈴木勝忠・白石悌三校注、古典俳文学大系11、昭和五十一年（一九七六）、集英社
- \* 13 『増補俳諧歳時記葉草・上下』曲亭馬琴編、藍亭青藍補、堀切実校注、平成十二年（二〇〇〇）、岩波文庫
- \* 14 『俳文学大辞典』加藤楸邨・大谷篤藏・井本農一監修、平成七年（一九九五）、角川書店
- \* 15 『校本芭蕉全集8 書翰編』荻野清・今榮藏校注、昭和三十九年（一九六四）、角川書店
- \* 16 『季の問題』宇田久著、昭和十二年（一九三七）、三省堂
- \* 17 『俳句講座6 俳書解説篇』昭和七年（一九三二）、改造社
- \* 18 『季語の研究』井本農一著、昭和五十六年（一九八一）、古川書房
- \* 19 『新修太田白雪集』鈴木大吉編、平成十四年（二〇〇二）、太田白雪集刊行会
- \* 20 『俳句周辺』頼原退蔵著、昭和二十三年（一九四八）、天明社
- \* 21 『伊東静雄詩集』藤井貞和編、現代詩文庫、昭和五十五年（一九八〇）、思潮社
- \* 22 『正岡子規集』松井利彦注釈、日本近代文学大系16、昭和四十七年（一九七二）、角川書店
- \* 23 『分類俳句全集9』正岡子規編著、高浜虚子・河東碧梧桐・寒川鼠骨校訂、昭和四年（一九二九）、アルス
- \* 24 橋本直（「豊かな時代」の網羅主義）「週刊俳句第四号」二〇〇七年五月二十日発行  
([http://weekly-haiku.blogspot.com/2007/05/blog-post\\_8742.html](http://weekly-haiku.blogspot.com/2007/05/blog-post_8742.html))
- \* 25 『俳句辞典 近代 増補版』松井利彦編、昭和五十七年（一九八二）、桜楓社
- \* 26 『大正の俳人たち』松井利彦著、平成八年（一九九六）、富士見書房

## 季の問題

### 頼原退蔵

(筆者注、本文は著者没後五十年の著作権保護期間が過ぎていることを確認の上、昭和二十三年・天明社刊の頼原退蔵著『俳句周辺』より転載させていただくものである。)

この問題についてはすでにこれまでも多くの論議が費やされて居る。それぞれの立場から、言うべき事は言い、考うべき事は考え尽されたかの観がある。今さら何を加うべき事があるだろう。けれども今日句作者の多くにとつて、この問題は果して十分に自覚された解決をもつて居るのであるうか。また指導者たちにしても、このような国の歴史の大きな転向期に際して、もう一度更めて省みる必要はないであろうか。従来この問題について見解の分れる根本的な岐点は、一は俳句が一の文芸乃至詩であるべき普遍性に立脚し、一は俳句を専らその伝統的特殊性によつて見ようとするとどこにあつた。而してこの二つの観点は本来決して相容れない結論に導くべきものでなく、実はこの両面からの考察によつてこそ、文芸として又詩としての俳句は最も正しく定位さるべき筈である。<sup>したが</sup>つて最初の分岐点は、同時に又一円周した最後の帰着点とならねばならぬ。然るに従来俳句の季について論ぜられるか

ぎり、普遍性と特殊性との問題は相反<sup>そむ</sup>いて歩き出したまま、再び合する所を求めようとはしない。こうして有季論者と無季論者は、互に肩の一面ずつを見ていつまでも対立して居る。

俳句は俳句である前にまず詩でなければならぬ。俳句が一の文芸である以上、それは当然のことである。この場合、俳句が詩として成立つ為に、「季」は果して必然に要求されねばならぬものであるうか。詩の普遍性に立脚しようとする論者の観点は、まずここに置かれる。俳句は言うまでもなく俳諧に於ける発句が、独立に創作され若しくは鑑賞されるようになったものの謂いである。だからこの問題は当然俳諧の発句に於ける季の考察に移されねばならぬ。発句が何故に季をその成立上不可欠の要件とするに至つたか。この史的考察はすでに明かな結論を示して居る。即ちそれは全く形式上の約束として認められたものであつた。長連歌が漸くその形態に何等かの整備が必要とされるに至つた当初、発句は一座の挨拶として当季の景物をよむという事が約束された。それが連歌俳諧<sup>わた</sup>に互つて長い伝統となつた「季」の發生である。だとすれば、そうした言わば偶然的約束が、たとい長い伝統をもつたにせよ、俳句の詩としての本質と深く関わるべき筈はない。それが史的考察から下された一の結論である。

一般に俳句が詩であり文芸であるとすれば、それは何よりもまず作家自身の生きた生を表現したものでなければならぬ。それが謂わゆる十七字の言葉の形式によつて、美的情緒又は感情に訴えられた時、そこに俳句と呼ばれる短詩が生まれる。



このように文芸の最も普遍的な性質から俳句を考えると、その根本に存すべきものは作者の生活感情であつて、「季」の感情ではない。もとよりそうした生活感情に謂わゆる季感を伴う場合は極めて多いであろう。同時にそれがいついかなる場合でも、必ず季感を伴うとかぎられない事もまた自明である。むしろ一般的に言えば季感が伴うことは特殊の場合だと見られる。このような見地から論ずるならば、何故に俳句が季をそれほど重大視せねばならないのか、又俳句が花鳥諷詠に限らるべき理由が何処にあるか、そう反問せざるを得ないだろう。もし俳句が季感に託された生のみを表現する文芸であるならば、そう限定すべき理由の究明は姑く措くとしても、少くともそれは俳句自ら詩としての領域を狭めるにすぎないであろう。俳句に於ける季の必然性に対しては、こうして一方で有力な否定の根拠が与えられて居る。しかも現実には俳句作家の大多数は、十分の自覚を持つて居るか否かはとにかく、有季の句を彼らの手帳に一杯書きこんで居る。ホトトギス派は相変らず全俳壇の王座にあつて微動もしない。では何がこの有季俳句派を強力に支持しているのであるか。もしそれが単なる伝統的形式への無自覚な服従によるのであるならば、封建機構の解体に迫られている今日にあつて、それらの支持はやがて無力化されるであろう。又されねばならない。随つてもし有季論をあくまで主張するとするならば、すでに述べた季の必然性に対する否定の根拠を覆すだけの理由をもたねばならない。そうした理由が果して求められるであろう

か。

有季論者の最も強力な武器とするものは、第一に日本の風土的条件であり、第二に俳諧美の理念とされる余情である。第一の理由に基いて徹底的に有季を主張したものに乙字がある。彼の論はこの立場に於けるかぎり最も代表的なものである。而して四季の序が正しい日本の風土的特徴が、俳句の季の根本に結びつくに至つたのだとするこの説明は、必然に俳句を自然詩と限定せねばならなくなる。仮に一步を譲つても、あらゆる人事に必ずこの風土的自然観が濃く纏わつて居るとしなければ、俳句としての成立は許されないのである。固よりそれが日本の国土に生じたものであるかぎり、そこに何等かの意味で風土との關係をもたないものはないであろう。けれどもその程度の連想を、誰も季節感とは考えない。又それならば俳句を季感の文芸として、特に他から分つ必要もないのである。だから乙字は人事はこれを季題とは認めない態度をとつた。その意味で彼の論旨は極めて徹底して居る。それにしても俳句は自然詩でなければならぬという理由は、ただそれが自然現象を詠ずる詩として発生したという説明のみでは、史的考察の結果からも満足されない。第二に余情の美によつて季の必然性が説かれる。それは言いかえると俳句の伝統的理念を論拠とするものである。芭蕉が俳諧に文芸としての永遠性を与えたのはさびの美であつた。さびは中世の和歌に於ける幽玄、連歌に於けるひえ・やせ・さびから直接の伝統を承けたもので、それは要するに余情の美を何よりも

尊しとする精神であつた。而して詩形として最も短小な俳句が、このような余情に特に依存せねばならぬことは、当然に考えられるのであるが、その上芭蕉の天才は俳諧にさびの美を賦与する事に於て、完全といふべき成功を収め得た。こうして俳句は余情の文芸と言つても宜い特質を具えるに至つた。この場合季感を捉える事が、余情美の發揮の上にかに有効であるかは言うまでもない。だから俳句は季感をもつものでなければならぬという。しかしこの論拠から出發するならば、余情美はすでに我が国の一般文芸の理念とされたものである。それが俳句のみに限らるべき所以は勿論ない。もしまた最短詩形たる事を理由とするならば、和歌とても五十歩百歩の差である。和歌もまた季感文芸とする方が、余情を得る上により有効である。のみならず余情を最も多からしめるものは、必ずしも「季」には限らない。

有季論者が最も有力な武器とした二つの論拠は、実は季の問題を根本的に解決するものではなかつた。しかし何人もすぐ反問するであらう。そのように文芸乃至詩としての普遍性のみから論ずるならば、俳句が和歌やその他の文芸から分たるべき特性は何処に求められるのであるかと。実は問題の焦点はそこに在つたのだ。即ち俳句の特性が季の有無と本質的に関するか否かが、この問題を解決すべき鍵だつたのである。そこで考察は再び俳句が詩として成立するに至つた史的過程にかえらねばならぬ。そもそも俳諧が和歌・連歌から分たるべき特性として、最初から認められたものは何であつたか。

それは決して自然現象を主題とすることでもなければ、又余情美を最高度に發揮することでもなかつた。いうまでもなく俳諧が發生以來特性としたものは、その通俗卑近性であつた。貞門・談林の俳諧の特性とされた知巧のをかしみは、芭蕉によつて棄揚されたけれども、通俗性はあくまでも保持された。芭蕉は「春雨の柳は全体連歌なり、田螺とる鳥は全く俳諧なり」というあの名高い言葉で、俳諧と連歌乃至和歌との区別を極めて明白に示して居るのである。芭蕉の意をもつと詳しく知ろうとするならば、『三冊子』について見るが宜い。更に芭蕉の教を如何に門人たちが理解して居たかは、文章の「詩歌俳諧弁」を一つとつても十分明らかであらう。俳諧が漢詩・和歌と異なるところは、一にその眼前卑近の現実<sup>じやうぜん</sup>に立脚する点にあつた。

こう考えると「季」は少くとも俳諧の發生に即して、その特性とさるべきものではなかつた。「季」が俳諧の中に入つて来た史的過程は、単に連歌の形態を形式的にそのまま受け継いだというに止まるのである。即ち連歌の発句に季が必要とされたから俳諧もこれに従い、一卷の運びの上に定められた季の制約を、又そのまま俳諧でも襲用したにすぎない。だから古俳諧が知巧のをかしみを主として居る間、季は決して季感を伴うことを眼目とせず、ただ形式的に季の詞が有りさえすればよかつたのである。甚しきは借りの言掛に雁の季をもたせ、木篇に春と言つて椿を現わすような事さえあつた。季語が正しく季感を伴うものとして用いられたのは、実に蕉風

開基の後の事に属する。しかし俳諧が初めて文芸性を確立したのは、芭蕉によつてであり、随つてそれがたど俳諧の形式をそのまま承けたものにせよ、芭蕉俳諧に於て発句の季が文芸的本質として特性化されたならば、俳句の有季論はここに有力な根拠を得るであらう。然るに『去来抄』には次の如き問答が見えるのである。

卯七日、蕉門に無季の句興行侍るや。去来曰、無季の句は折々あり、興行はいまだ聞かず。(註、句は発句を意味し、興行は雑の俳諧即ち連句を意味するものと解される。)先師曰、(三浦若海旧蔵古写本による。他本に先師のとあるは誤である。)発句も四季のみならず、恋・旅・名所・離別等無季の句有りたき物なり、されどいかなる故有りて、四季のみとは定め置かれけん、その事を知らざれば、しばらく黙し侍るとなり。

即ち去来の伝える所によれば、芭蕉は発句に無季を許容して居るのみならず、進んで恋旅名所離別等には、却つて無季の句を好ましいと言つて居るのである。「いかなる故有りて、四季のみとは定め置かれけん」という言葉には、発句に於ける季の必要性への疑いが、明らかに含まれてゐるではないか。

だから芭蕉俳諧に於て、季が初めて正しく季感を伴うに至つたというのも、芭蕉が俳諧の文芸的本質を和歌・連歌と相通ずるものとした結果、連歌の季語が季感を伴うべきと同じく、俳諧の季語もまたその本来の意味にかへつたというだけである。芭蕉が連歌の約束を守つたには、それ以上積極的の意

義はなかつた。

考察はそこで更に遡らねばならぬ。連歌の発句が何故に季を必要としたか、その問題が解決されるならば、芭蕉にもまた満足を与え得るわけである。然るにこの問題は嚮に述べた如く、史的考察の結果はすでに明らかである。言わばそれは偶然の採用であつた。しかしそうした偶然が、何故あれほどに根強い伝統となり得たのか。そこになお新たな問題が潜む。だがこれも実は解決済みだつたわけだ。日本の風土の特徴や、余情美を尊ぶ文芸上の伝統理念によつて、一往解釈はつづられても、それは結局何も俳句のみに限られる問題ではなかつたのである。でも反問するものはなおあるであらう。それならば何故俳諧の発句に無季を許容する運動が早く起らなかつたのか。又何故有季の発句のみによつて長い間満足されて居たのであるか。この問題に対する答は容易である。一言にして言えば、そうした必要も要求も感ぜられなかつたからである。成程連歌にせよ俳諧にせよ、それが文芸乃至詩として存在を主張されるかぎり、そこには季感に託されない生の表現もあるべきであり、季節を離れた生活感情も味わわれなければならない。古人はそうした表現や感情のはけ口を何処に求めたのであろうか。だが発句が俳諧の特殊なただ一句に過ぎない事を思えば、この疑問は直に解消するであらう。そうした季を伴わない句は、俳諧一卷の中には数多くよまれる機会が与えられて居るのである。即ち無季の句は平句として自由に存在が許されて居る。しかもそれは付句としてのみ味わわ

るべきものでなく、一句に独立性をもつ事は、連歌が和歌の上句と下句との連続と異なる重大な特質として認められて居た事である。

今日の謂わゆる俳句が俳諧の発句の別称に外ならぬ事は言うまでもない。しかも今日の俳句はただそれだけである。これと並んで当然存すべき他の三十五句（芭蕉以後は三十六句の謂わゆる歌仙の形式が普通であった。）は、殆ど一というよりは全く創作される事がないのである。そうして俳句は花鳥諷詠だと宣言される。恐らく一般人々には、それが俳諧そのものの本質であるかの如くさえ聞かれて居るのである。成程発句は俳諧一卷中の最も主要な句であり、それ故にこそ発句だけが独立に創作されたのである。けれども又それ故に、他の三十五句が軽んぜられるという事は決してなかつた。付句は名の如く付句であるから、勿論独立に創作される筈はない。けれどもその鑑賞が一句として独立になされる事は常であつた。だから『三河小町』に伝える所によれば、芭蕉は付句が付肌を重んずべきは勿論だが、しかしよい付句は前句を聞かなくとも、それだけですでによい句であると言つたという。そして同書にはそうしたよい付句を選んで、前句なしに掲げて居るのである。これは後の前句付や高点を争つた付句と同じく、—その文芸的理念は異にしたが、—一句立として鑑賞されたのである。

浮世の果はみな小町なり

門しめてだまって寝たる面白さ

泣く事のひそかに出来し浅茅生に

これは『猿蓑』や『炭俵』に見える芭蕉の付句である。ここには季感を伴わない生が、しかもさびの美しさの中にみごとに表現されて居るのではないか。発句に「季」を必要としたのは、要するにそれが巻頭の句として一座の挨拶の意味で最も便宜であつたからである。しかしそれが形式として襲用されるのみならず、長い修練の間に季感文芸として高度の発達を遂げた。そこに日本の風土的特徴が関係し、又余情美の理念がその生育を培つた事には、固より何等の異論もない。その意味では発句が、又俳句が、そうした特色に益々修練を加えて行くべき事は、これまた何等異論を挟むべき所ではない。けれどもそれ故に俳句を季感詩と限定してしまう事は、実は自ら好んで狭い詩境に閉じ籠ろうとするものである。特に今日連句が殆んど行われて居ない場合、俳人たちは一体そうした狭い詩の領域で、どうして満足し得るのであるうか。むしろ怪しみにたえない位である。連句が盛んに行われ、そうしたそこでは季感を伴わない詩が、自由に作られて居た時代にすら、芭蕉は恋・旅・名所・離別等には無季の句が有りたいたと望んで居る。それはそのような素材にあつては、素材そのものの性質上季感の有無の如きは、少しも重大な問題ではないからである。そうしてそれが無季の句としてよまれた場合、芭蕉はそれを発句でないなどと言う筈は勿論なく、彼自身もまた

もの一つ我が世はかろきひさご哉

朝よさを誰松島ぞかたごころ

武蔵野やさはる物なき君が笠

等無季の発句を作つて居るのである。

無季の発句は芭蕉に限らない。連歌からすでに存して居り、

それは特別の例外にすぎない。こう言うかも知れない。しかしそう手軽にかたづけては貰いたくないのである。成程形式としては無季の発句は例外とすべきものである。芭蕉の雑の発句にしても、彼の全部の発句の中で一パーセントにもすぎない位の数であろう。けれども仮令少数にせよ、季感を伴わないものが発句或は俳句として認められるという事実は、これを無視する事は出来ない。俳諧本来の文芸性から考えて、理論的には無季の発句を俳諧でないとする事は出来ないからである。だから自由律や新興俳句等の論者を待つまでもなく、夙く惟然の如きは雑の発句が当然存すべき事を強く主張し、『二葉集』・『花の雲』・『当座払』等に彼一派の作になる雑体の発句を盛んに発表して居るのである。ただ惟然は総じての句風が奇矯に失し、為に折角の彼の主張も多く顧みられないうで終つた。その後もこのような運動は格別起らなかつたが、これは繰返して言う、一方に連句の作が並行して存したからで、ことさらにそうした運動の必要がなかつたのである。今日の人は句会と言へば、集まつた人が各自句を作つてそれを互選する事だと心得て居る。しかし句会とは本来俳諧の興行、即ち連句の会を称するのであつた。発句だけを作るなら、何も必ずしも集会する必要はないのである。ともあれ俳諧は一

巻の創作がその本体である事を銘記せねばならぬ。発句のみの個人集というものは、江戸時代でも後半期になつてから多く出たので、俳人としての巧拙を問われるのはまず連句の作であつた。

芭蕉は発句の「季」について、「その事を知らざればしばらく黙し侍る」と言つて、強いてその問題に解決を与えようとしなかつた。芭蕉らしい態度である。そうして彼は有季の発句に於て、俳諧が達し得る最高度の美を示すことが出来た。けれども芭蕉が俳諧にさびの美を発揮したのは、何も発句に限つたわけはなかつたのである。無季の付句にも俳諧としての最高の美を与えた。しかもこの無季の付句をもたない現代の俳諧は、『去来抄』に伝えられたあの芭蕉の言葉を味わおうともしないで、季感を伴う俳句のみに閉じ籠ろうとするのであるうか。しかし人は又言うかも知れない。それでは俳句は川柳と同じものになりはしないかと。この問題については、「川柳の文芸性」と題して別に筆を執つたから詳しく述べないが、要するに川柳の本性はやはり俳諧である。それがさびの理念の支配から出てをかしみもしくはうがちへ走つた結果、かの『柳多留』に収められた如き作品が生れたのである。だから川柳の笑が単なる笑でなく、作者の深い愛に包まれた場合、それはやはり俳諧にかえるであらう。或は俳句と同じものになると言つても宜い。或は又そこにも、俳句の領域が拡張されると言つても宜い。所詮俳句は本来花鳥諷詠に封じ込めらるべきものではないのである。

# エントロピー的俳句論

前田霧人

次は高浜虚子著『俳句はかく解しかく味う』（岩波文庫）冒頭の虚子の言と巻末の大岡信「解説」抜粋である。

大胆に引つくるめて言えば、徳川初期から明治大正の今日に至るまで、多少の盛衰もあり多少の変化もあるにしたところで、要するに俳句は即ち芭蕉の文学であるといつて差支ない事と考える。即ち松尾芭蕉なる者が出て、従来の俳句に一革命を企てた以来二百余年に渉る今日まで、数限りなく輩出するところの多くの俳人は、大概芭蕉のやつた仕事を祖述しているに過ぎん。（高浜虚子）

新興俳句は短命におわつた。俳句という短小な形式には、それそのものが要求する最も自然で必然的な諸条件があつて、それを理論的また演繹的に俳句作者たちに押しつけることは出来ないにもかかわらず、帰納的、また結論的に検証すれば、おのずとそれら諸条件の厳たる支配が明らかになるというようなどころがある。新興俳句運動もまた、このハードルを悠々と乗り越えて別天地を開拓するところまではいかなかつた。

同じことは、第二次大戦後一九五〇年代から六〇年代にかけて隆盛を誇つたいわゆる前衛俳句運動についても

言えることだつた。（略）

しかしここで興味ぶかいのは、いずれの場合にあつても、俳句革新運動の中心的動機の一つは、「反花鳥詠諷」、すなわち「反虚子」にあつたということである。それは、さかのばれば、「俳句は芭蕉の文学」という虚子の定義を乗り越え、新しい俳句の旗じるしを別のところにうち樹てようとする意欲において彼らが共通していたということでもあつた。「守旧派」虚子としては、これは実にわが意を得た成行きだつたと言つてよい。なぜなら、少なくとも結果から見れば、俳句界の動向は、仮に大揺れしたように見える場合でも、揺れがおさまつてみると、大揺れの震源地であつた俳人たちさえ包みこむ形で、虚子の指し示した方向に向けて再編成されてゆくのが常だつたとさえ言つていいからである。

虚子が大正中期以後に唱えた「客観写生」や「花鳥詠諷」の立場をひたすら墨守するだけの俳人たちは論外だが、現代俳句界において先導的立場にあるすぐれた少数の俳人たちの作品を見ると、彼らが仮に表面的には虚子とかげ離れた句を作っている場合でも、深いところで虚子に多くのものを学び、咀嚼し、別の形で生かそうとしていたのを感じないではいられない。その意味では虚子は今なお後進世代にとって偉大な敵であり得ている。そして、偉大な敵は卑小な味方より何十倍も私たちを育ててくれるのである。（大岡信「解説」）

江里昭彦は「そもそも、なぜかように性懲りもなく若手が反虚子に傾斜するのか、その判断や嗜好の根源に、大岡は考えを及ぼしたことがあるのだろうか。」(「輪舞―旧きものと新しきもの 俳論批評一九八九(4)」)『生きながら俳句に葬られ』深夜叢書社」と反発する。

しかし、ここに「宇宙全体の崇高な形而上学的法則」とも称される「エントロピーの法則」というものがある。

クラウジウスは、「閉ざされた系」(略)のなかでは、エネルギー・レベルに違いがあれば、常に平衡状態へ向かうということを発見した。

たとえば(略)真つ赤に焼けた火掻き棒を暖炉から取り出して空気中にさらすと、火掻き棒が冷えるにつれて、周りの空気が熱くなる。(略)そして最後には、火掻き棒も周りの空気も同じ温度になってしまう。(略)

平衡状態とは、エントロピーが最大になったときの状態で、そこには別の仕事を行なうのに使用できる自由なエネルギーは、もはや存在しない。クラウジウスは「世界において、エントロピー(使用不可能なエネルギーの量)は常に最大へと向かう傾向がある」と結論して、熱力学の第二法則を定式化したのである。(ジエレミー・リフキン著・竹内均訳『エントロピーの法則』祥伝社)

要するにエントロピーの法則(熱力学の第二法則)は「宇宙(あるいは閉ざされた世界)の全ては体系と価値から始まり、絶えず混沌と荒廃に向かう」と説明することが出来る。

そして、最も大衆に手が届き易い俳句という短小な形式そのものが陥る最も自然で必然的な俗化、形骸化の諸条件の厳たる支配をもたらすものが、このエントロピーの法則である。揺れがおさまって「大揺れの震源地であった俳人たちさえ包みこむ形で、虚子の指し示した方向に向けて再編成されてゆくのが常」の状態とは、エントロピーが最大になった平衡状態、即ち、新たな別の仕事を行なうのに使用出来る自由な詩的エネルギーは最早存在しない混沌と荒廃の極致であるとすれば、先に掲出した論の様相は一変する。

そして、このエントロピーの法則を最も良く知り、怖れ、新たなエネルギーの不断の注入を自らに課した論が正に芭蕉の不易流行説であり、それぞれの時代に注入された新しいエネルギーが大きくなるなりとなつて俳句界を席卷したものが新傾向、新興俳句、前衛俳句など俳句革新の運動であつた。

芭蕉は「世にはいかには三合ほか出ず、七合は残りたり」(森川許六『歴代滑稽伝』)、「俳諧ニ古人ナシ。只後世之人ヲ恐れ」(向井去来『不玉宛去来論書』)と言つた。

我々が真に芭蕉の後継であり、彼の「恐れ」に足る「後世之人」であるためには、芭蕉の遺した三合に胡坐をかくことなく「此道や行人なしに秋の暮」との彼の「所思」を胸に、指し示された残りの七合と真摯に向き合うことではないか。

精々「卑小な敵」ではない誰かではなく、芭蕉こそが我々にとって「偉大な敵」であると同時に「偉大な味方」であり、常に意識して行くべき偉大な存在なのである。

## 後記

前田霧人

創刊号は約二〇〇部を印刷して謹呈させていただきましたが、多くの方々から望外の御言葉を賜りました。ここに改めて心より厚く御礼を申し上げます。

今号の表紙絵は大阪府高槻市にある阿武山<sup>あぶやま</sup>地震観測所時代の盟友、浅田照行氏に御願いで描いていただいたものです。ここに心より感謝の意を記す次第です。

また、目に優しく薄く開き易い書籍用紙（横目・67.5kg）なるものを発見し、今号より採用させていただきました。

今号の文は、ある俳誌への寄稿文を書いている内に集まった資料と、たまたま入手した二編の名著、宇田久著『季の問題』、頼原退蔵著『俳句周辺』とが何故かマッチングしてしまった多分にハプニング的なものです。機会を与えて下さった皆様に心より厚く御礼を申し上げます。

また、同文に引用した頼原退蔵「季の問題」の全文を『俳句周辺』より転載させていただきました。「俳句研究」昭和二十一年十一月号に初出の示峻に富む名文を是非御一読下さい。

そして、最後の文は、江里昭彦氏より御名著を賜って以来ずっと思っていたことを、余白の二頁分に合わせて書かせていただいたものです。どうぞ、御笑覧下さい。

「宇宙における物質とエネルギーの総和は一定で、決して創成したり、消滅するようなことはない。」あるいは「無から有は生じない。」という「エネルギー保存の法則」（熱力学の第一法則）と人生との係わりを論じ合いながら友人と歩いた学生時代を今、懐かしく思い出しています。

「新歳時記通信」第二号

発行日 二〇〇八年七月七日

編集発行 前田霧人

発行所

電話

FAX

メール

表紙絵 浅田照行

\*

「新歳時記通信」全文掲載ホームページ

<http://kirihito.holy.jp/sajit/>